『広島大学文書館紀要』
第一七号（二〇一五年二月）

記　録

# 原爆被災および敗戦後の広島工業専門学校での学生生活の思い出

助野信正

# 記　録

## 原爆被災および敗戦後の広島工業専門学校での学生生活の思い出

**日　時**　平成二六年八月一八日一三時半～一五時半
**場　所**　広島大学文書館館長室
**語り手**　助野（すけの）　信正（のぶまさ）（広島工業専門学校卒業生・昭和一三年機械工学科卒）
**聞き手**　小池　聖一（広島大学文書館長）
　　石田　雅春（広島大学文書館助教）
　　助野（すけの）　剛信（よしのぶ）（助野信正氏ご子息）
**同席者**　平成二六年七月に広島大学文書館は、助野信正氏よりご自身の原爆被災体験手記の寄贈を受けました。
**趣　旨**　戦時中から敗戦後にかけては、各前身校とも史料があまり残っていません。そこで資料の寄贈にあわせて助野氏に対して聞き取り調査を実施しました。
　　本稿では、この聞き取り調査の一部を抜粋・編集したものを紹介するとともに、あわせて助野氏の「広島原子爆弾被爆体験記」を掲載します。（石田記）

助　野　信　正

### 生い立ち

**○石田**　今日はよろしくお願いいたします。まずは被爆されるまでのお話をお伺いしたいと思っています。助野さんの本籍は芦屋市山芦屋町になっていますが、これは代々芦屋にあるお宅ですか。

**○助野**　もう先祖代々芦屋にいて、私は三男ですから、三〇年ほどしてから分かれて芦屋を離れました。生まれた所は山のほうですが、私が生まれる前の大正時代、親の代までは七二軒くらいの古い昔の人が住んでいました。

**○小池**　体験記には旧制中学校の四年生と書かれていますが、どこの中学校を出られたのですか。

**○助野**　神戸一中です。全国有数の学校で、中身も、先生もがしがし本当に勉強しました。

**○小池**　尋常小学校から行かれたのですか。

**○助野**　はい。小学校でも一年生からほとんど一位だったと思います。先生がよく、何かの代表といったら、すぐに私が引っ張り出された。

○**石田**　では、ずっと級長ですね。

○**助野**　ええ、一年から六年までの間、二学期に級長になったのは一回だけ。あとは全部一学期に一番に級長をやった。べつに、だから偉いだろうとか思わなかった。ただ、勉強を一生懸命にしたら、そうなっただけだと。

○**小池**　それで神戸一中に受かって、一年、二年は本当に勉強ができたわけですか。

○**助野**　ええ、三年まではね。本当にあんなに勉強したことはない。

○**石田**　当時の神戸一中では英語の授業はありましたか。

○**助野**　もちろん。よその学校は知らないけど、英語なんて教科書以上に勉強した。それで三年生を過ぎて四年生になった時に戦争で、日本中が全部勉強はやめということで工場に行って、そこで一生懸命にやっていた。

（昭和二〇年三月に）卒業していよいよ高校へ進学しようとした時に、「いや、ちょっと待て。もうしばらく続けて」ということで、さらに一学期分続けた。当時、本当はずっと続けるということだったのでしょうね。私たちの年から五年制が四年制になったので、卒業したけれども、中学校から行っている同じ工場へ、そのままずっと行っているのです。

○**小池**　神戸で学徒動員されていたわけですね。学徒動員では、どのような工場に行かれていたのですか。

○**助野**　その辺の町の工場です。私が作っていたのは部品ですが、組み立てみたいな、これぐらいの大きさの爆弾です。

一年中同じものばかりをやっているのではなくて、二回ほど職場を変わりました。一回目は、ドライバーで穴を開けたり、何かを合わせたりして、爆弾の尻尾の部分を作っていた。ところが、途中でこちらの仕事場へ来いというので行ったら、今度は爆弾の全体を作れと。

戦争中ですから、鉄の板をカンカンとやったり、接着の溶接をしたり、ああいう仕事をしていた。全体ではない一部の組み立てをずっと続けてね。それで、もう学校へ進学できると思ったのが駄目で、そのまま続けて工場へ来なさいと。学年だけは広島工専（旧制広島工業専門学校）という名前を付けてもらったけれども、することは中学校で行っていた工場の仕事をそのまま継続です。

それも「継続」と言うだけで、いつまでということもなく、（昭和二〇年）七月の終わりごろになって、「もうよろしい、学校へ行って勉強しましょう」と言われて広島工専へ行って、たった六日間勉強をした後で、原爆でバーンとやられたのですね。

ですから、自分でも、どのようにして進学をしたのか分からないですね。とにかくバーンとやられたから家に帰った。六日にバーンとやられて、七日はそこら辺でひっくり返って、七日の夜中に真っ暗の中を家へ帰った。

## 進学の経緯

○**小池**　そもそも広島工専には、なぜ行かれたのですか。

○**助野**　当時は戦争中ですから、東京、大阪、京都という大きな大学

は全部空襲でいかれていた。学校がやられたかどうかは別にして、受験ができなかった。受験できるところといえば、四国。ここは敵機も全然来ていなくて何ともない所で、あそこに行こうと。それで、四国の松山（旧制松山高等学校）へ願書を出したら、願書を送り返された。何しに来たかと言わんばかりの話でしたよ。

それで、（旧制）広島高等学校の願書も駄目ということで、いわゆる専門学校の願書で日本のどこかにないかと。すると、広島工専は広島でまだ一遍も爆撃されていないし、理学部もきちんとあったので、そこへ行こうかと行ったのです。

**○石田**　では、最初は専門学校ではなくて旧制高校に進学したかったのですね。

**○助野**　本当は高校に行きたかったのですが、おまえは要らんと、来なくてもいいと（笑）。

**○石田**　陸軍士官学校とか海軍兵学校などは考えなかったのですか。

**○助野**　軍隊に行ったらあかんと。軍隊に行ったら、体がいつやられるかもしれんからと軍隊は避けました。

**○石田**　それはご両親のご意見ですか、それともご自身のご意見ですか。

**○助野**　私自身です。親とは、あまり相談はしなかった。したかどうか覚えてはいないけど、とにかく兵隊には絶対に行かないよという話だけは親としてある。

**○石田**　戦時下でそういう考えを持つというのは難しかったのではないかと思うのですが、何がきっかけで軍隊が嫌いになってしまったのですか。

**○助野**　なぜかはあまり分からないけど。なんでだろう。とにかく兵隊には行かないと。兵隊に行かないということは、軍の学校へは行ったらあかんということでしょうね。そんなことぐらいしか記憶にないな。誰にこうしろと言われたという話も記憶にないな。

**○小池**　四人きょうだいでおられて、三人ともきちんと学校へ行かれているわけですから、経済的には豊かなほうだったと思いますね。神戸一中に受かるぐらいですから、非常に勉強ができたと思うのです。本当に望めば、神戸一中が終わったら、すぐに陸軍士官学校か海軍兵学校に行くというのが多かったと思うのです。

**○助野**　ええ、そんなのは友達にもたくさんいたよ。でも、私は行かないと。陸士とかは、中学校でも二年生、三年生、四年生までかな、行くのは。だけど「そんなところに行ったら、あかんぞ」と、私も友達に言ったことがある。

**○小池**　お友達の間で「あれは反軍思想を持っとるんじゃないか」とか言われたのではないですか。

**○助野**　さあ、どうかな。けんかしたこともあるわ。

**○小池**　関西は、結構みんなそういうふうに言ったのかもしれませんね。

**○助野**　「おまえは何でそんな兵隊に行くんや」とか、「陸士に行って、戦争を何でしたいねん」とか言ってね。だいたい神戸一中は勉強をしたから、勉強のほうに一生懸命になって、「そんなところへ行って命を預けるようなことは、あほか」と。

## 原爆投下直後の状況

**○石田**　「広島原子爆弾被爆体験記」を拝見していて、もう少し詳しく聞きたいと思ったのが、校舎がバーンと倒れますね。そこから、這い出すまでの間は、どのぐらいの時間がかかったのですか。

**○助野**　それが分からないけれども、二、三時間だろうと思うのです。というのは、出てきて、やいやい言って、それで校庭の陰で一時間ほどいて、「昼や、もう出ていこう。どこかへ行って何とかしよう」と言ったのが昼だったと思うのですが。

だから、ボカンとやられて二時間、それから外へ出て、「おい、おい」と言いながらが一時間、それから木の下で「ああ、もうあかん」と言っていたのが一時間か二時間。そうすると、朝の八時から昼の一時か二時ごろまで。そこから、「ぼちぼち逃げようか」と逃げて、よその河原の死体に「おい、おい」と言いながら自分の寮へ逃げていったのが一時間ですから、そんなものだろうと思います。

**○石田**　あまり思い出したくない話かもしれませんが、川に死体があったというのは、満ち潮ですか、引き潮ですか。

**○助野**　広島の川は満ち潮も引き潮もないのと違う？上から、いつもすれすれで水が流れていたからね。それも広島市は平たんですから、あまり満ち潮は関係ないように思います。その時はそんな感じはなかったけどね。

とにかく死体がいくらでも上から上から流れてきた。それだけは覚えています。「うわあ、おまえ、あかんか、あかんか」と言ってね、顔を見て、顔をこうして、「もうええわ」というのが何千人。一瞬ふっとしても百人いたからね。

それに友達などを入れて、「崖から落ちよるんよ」「崖から落ちるのと違うて、水に飛び込んどんねんぞ」とか、「いや、あいつ滑って落ちてた」とか、そんなことばかり言ってね。結局は、自分たちが逃げることだけでした。

**○石田**　倒れた校舎から出る時には、誰かに助けてもらったのですか。それとも、お一人で這い出したのですか。

**○助野**　みんなで這い出したかな。バーンとやられたでしょう。そうしたら、もう動けなくなって、ここにも書いていますが、とにかく力いっぱい這い出して、這い出したところが、「おーい、おーい」とお互いが手を引っ張り合って、それでやっと下りて、下りようと思ったら、校舎の屋根がこうなって、普通は止まるが、下まですとんと落ちた。それは覚えています。だから、三時間ぐらいかかったのかなと。

**○石田**　内側から友達同士で助け合って外に出た格好ですね。

**○助野**　ええ、そうそう。だから、自分が元気だったから出たのでもなし、友達同士、「おーい、おーい」と言いながら、「ほんなら、足ちょっと引っ張り出したるぞ」とか、「血が出とるか。ほんなら、手をぬぐうたる」とか、いろいろお互いがやって、それで出てきて、「あかん」と言ったら、「何、顔をけがした。ほんなら」と、板をバンと外してやったとか、とにかく自分だけではできなかった。

**○石田**　ほかの方の体験記などを読んでいると、広島工業専門学校には市民の方が助けを求めて流れ込んできて、化学科の先生方が、元の

原材料からヨードチンキを作って治療したという証言があったのですが、そういうのはご記憶にないですか。

**○助野**　そういうのは聞いたことがないし、実際に見たこともないな。ただ、けがをして薬を貸してくれとか、そういうことは、校舎のここにみんながいるから、「おーい」と言えば、それはやったかもしれない。

**○石田**　学校から脱出しようと決めたそうですが、ご自身の判断ですか。

**○助野**　これは、みんなお互いに、「もう早うここから出て逃げんと、こんなとこでおったらあかんぞ」と、お互いだから、自分の判断というか、みんなの判断ですね。

**○石田**　みんなというのは何人ぐらいのグループですか。

**○助野**　二人、三人が一〇グループぐらいあったのかな。ずっと、もう並んでいますからね。その向こうが、どこへ曲がってどこに隠れていたのかは分からないです。

**○小池**　例えば、先生が来て「逃げろ」という指示があったわけではないのですね。

**○助野**　ない。先生の顔も覚えていない。その時は確か朝来て、出席を取ってボンだから、先生の顔なんて知らん。

**○石田**　では、宇品から段原を回って逃げようというのは、どなたが道を案内したのですか。

**○助野**　「宇品のほうへみんなで行こう」と言ったのは、広島の中心から早く逃げようということで言ったのです。ところが、「海岸でストップしたら逃げられへんやないか。歩いてこっちに逃げなあかんぞ」というので、途中から向きを変えたということですね。

そして、「戦争はひどいな」と言いながら、列車が動かなくてもいいから芦屋の家に帰ろうということで、その日はしようがないなと広島駅のそばの寮へ帰った。しかし寮は壊れていて中には入れない。

ここで飯も食わずに我慢をしながら、翌日の夕方になって、「おい、どっかに行こう」と、広島から一駅か二駅歩いて、そこから電車に乗って芦屋まで帰ろうとしたのです。ごそごそ歩いて行ったのです。それで、次の海田市という駅の手前におっちゃんがいて、「飯をやろう」と。「ありがとう」と言って飯を食べた。

## 帰郷・敗戦前後の生活

**○助野**　ところが、電車も空襲を受けて、途中でストップしたり、トンネルの中に入ったり、隠れ隠れして岡山まで来たら、みんな降りてしまった。それで私は席に着けた。それまでは列車の外にぶら下がっていたという、そんなことです。

それで、朝の四時ごろに帰って、「おーい、帰ったぞ」と言ったら、「何をしに帰ってきた」と怒られてね（笑）。もうしようがないなというので事情を説明したら、おふくろが「え、かわいそうに」と言って手をつないで中に入れてくれて、お茶を飲ませてもらったり、ごはんもその時はおかゆさんみたいなものだったかな、よくは覚えてない。とにかく戦争中ですから、食べるごはんもまともにないのに、帰ってきて「飯をくれ」と言っても、まともには食べられませんよね。そう

いうことで、何とかしたのでしょう。

それで、一五日までの一週間ぐらい、寝たきり。寝たきりといったらおかしいね。ラジオを聞きながら、そろそろ戦争も終わりだと言っていたら、一五日になって戦争に負けましたと。しようがないな、負けたけれども攻撃はされないということで、しばらくしていたら、「おまえ、こんなところにおったって、いつまでたっても命はちゃんと守れへんぞ」と言って、おやじが田舎に連れていってくれた。

**○石田**　田舎はどちらになるのですか。

**○助野**　私の記憶と少し違う。本当の田舎は有馬の藍本という所。三田の二駅奥に藍本という駅があります。そこが、おやじの里。ところが、その時のおやじの勤め先は、神戸の北側の鈴蘭台の二駅ほど奥の学校だった。そこに行って、二カ月間毎日、「おい、出てこいよ。百姓しよう」と言って、田んぼをしたり、おやじについて何かしました。

**○石田**　二カ月間、体がだるいとか、そういうことはまったくなかったのですか。

**○助野**　だるかったのかな。とにかく命からがらですから、元気でぴんぴんはしていません。医者に診てもらいましたよ、自分では、あまり体調が悪いとは思わなかったけどね。

**○石田**　そうですか。よく急性の放射線障害で毛が抜けたりとか、あるいは歯茎から血が出たとかありますが、そういうことはなかったですか。

**○助野**　なかったですね。二、三時間、ぺしゃんこになった校舎の下敷きになって、放射線を受けていないのですね。校舎の下敷きということは屋根の下敷きで、放射線は来ないのではないか。よくは知りませんが、とにかく何ともなくて、外に出てきたら体中けがだらけだった。ここでも、まだ体中に大きなけがの痕が残っています。この辺にもね。

## 復学・呉市広町での学生生活

**○助野**　ただ、二カ月たって、「もう体もしゃんとしたやろう。広島の学校にやりますよ」と言って行ったところが、広島の学校はぺしゃんこで、行ったら呉市で、呉も泊まるところが何もなくてね。

そのころは、戦争で海軍工廠の雇いの人がいたのですね。それが、もう帰ってしまって空っぽになっていた。そこに私たちが行って勉強もし、寝るときは、最初はそこで寝たけど。毎朝「よいしょ、よいしょ」一里ぐらい離れた遠い所へ歩いて、広町へ行って勉強したということです。校舎といっても、認められたのではなしに、空いていたからしようがなく使ったと。とにかくそんなことで空いた所へ入って、友達同士で、そこから毎日行ったり来たり。若いからしんどいとは言いません。

**○石田**　思い出に残っている先生はおられますか。

**○助野**　先生、うーん。ちょっと今すぐには出てこないぐらいいないです（笑）。一人や二人はいたのでしょうね。そのころは先生といっても、教えたらすっと帰ってしまう。だから、みんなで「おーい、今日習ったこと、どないや」「ああ、もうええわ」と言って、メモをした人のメモを見て、そうかと言うぐらいのことです。

それよりもむしろ休みのたびに広島の近所の地方へ行って、生徒を集めて、勝手にと言ってはおかしいけれども、そこでいろんな話をし

たり、黒板に絵を描いたりいろんなことをして、そこの学校の子どもの相手をして、その日は終わって帰ってくる。それが今の呉線のポイント、ポイントの学校で、誰か知らないが、「おーい、今度この学校に行くぞ」と言ったら、四、五人で行って、話をしたり、劇を教えてやったり、とにかくそんなグループをつくって、学校の楽しみというか、していました。

**○石田**　それはアルバイトですか。

**○助野**　アルバイトといっても、私たちはお金をもらっていませんし、広島で集めたグループの誰かがお金をもらっていった（笑）。よく知りません。われわれが直接お金をもらった覚えはないです。

**○石田**　そうですか。敗戦後は食料がないので買い出しに行ったという話を聞くのですが、食糧事情はどうでしたか。

**○助野**　食糧事情は、自分の家に帰って飯を食うのとは違って、広島だから、あまり好き勝手には食べなかったけれども、腹のほうは食うものがないということではなかったね。

**○小池**　それは、お父さまからの仕送りがあったということですか。

**○助野**　いいえ、ないですね。おやじは仕送りどころか、自分の家の者にもよう食わさんぐらいだったと思います。家に帰っても何もなかったから。

**○石田**　学費はどうされたのですか。

**○助野**　学費は親が払ったのでしょうね（笑）。おふくろぐらいと違うかな。何百円か何か知らないけど、親から出していたのでしょう。だから学校に行っても、「おまえは金がないから帰れ」とは言われなかったし、私たちは学校へ行って昼飯ぐらいは食べたから、まあそんなことでしょう。

**○小池**　お母さまは、そのころ何か収入を得ておられたのですか。

**○助野**　収入なんかはないよ。家にいて、おやじと一緒に私たちを育ててくれたのだから、おやじのお金でしたのだろうな。それと、家ではそんなにお金は使わない。畑があって、一生懸命に自分でして食べ物を入れてきたし。それ以上のことは、あまりよく知らない。

おふくろは困って、自分は食べなくても息子や娘にしたかもしれないけど、とにかく私に、お金がないよ、我慢せえよというような話はなかった。

**○小池**　また、お金を送れというような電報を打つこともなかったのですね。

**○助野**　それもない（笑）。言っても送れないのは分かっているから。

## 広島市での学生生活

**○石田**　呉市広町で授業が再開するのですが、その後、広町の建物も占領軍が接収することになって、翌昭和二一年に、広島に学校が戻るのですが、そのへんのご記憶はございますか。

**○助野**　呉にどのくらいいたかな。やはり一年ぐらいでしょうね。もう一年か二年か、よく覚えてはいませんが、だいたいそれぐらいの期間で、今度は呉から広島市のすぐ手前の向洋へ行って。

うーん、お金はどうしたかな。近所の女の子や一緒にいた男の子や、グループで部屋を借りて、そこで飯を食って。やはり自分たちでお金

を出したのでしょうね。でないと、親兄弟が飯を食わせてくれたのとは違うから。そこで下宿みたいな格好ですね。ですから、やはり自分でお金は何とかしたのだろうと思います。

**○石田**　向洋から学校までどのように通われたのか、ご記憶にありますか。

**○助野**　国鉄の向洋から広島に行って、広島から市電で学校まで行って。それで、学校は一〇棟ほどあって、われわれのいた二階建てのしっかりしたのはつぶれて入れないから駄目ですが、隅っこの平屋の建物では何かいろいろしてもらえたのかな。飯はどうしたかな。昼飯を食ったかはあまり覚えていない（笑）。寮で弁当をもらったかな、よくは覚えていません。とにかく、よく分からないけど昼は抜きで、晩はそこできちんと晩飯を食べさせてもらったと。

　広島は、そのようにつぶれた学校へ行って、隅っこのところで教えてもらった。普通、工業学校といったら機械を触ったり運転したりするけれども、それはもう原爆でつぶれてしまって駄目です。

**○石田**　では、実習はまったく受けた覚えがないのですか。

**○助野**　まったくないな。

**○石田**　製図はどうですか。

**○助野**　図面も何回か、卒業試験とか何かの時に図面を描いて出したけど、いい加減なもので、今から言ったら「何だ、これは」というような図面だったと思います。とにかく、しようもない図面みたいなものを出したことが二、三遍あるかなという記憶ですね。

**○石田**　では、ほとんど講義が中心だったのですか。

**○助野**　そうですね。それも広島で勉強はしたけれども、ただ勉強だけで、そういう実習はほとんどなかった。その前の呉などは遊びみたいなものです。先生が黒板に書くけれども、先生もいい加減なことしか言わなかった。われわれは一生懸命に書いたけれども、友達がげたを履いて、がらんがらんと入ってくる。「おーい、もっと静かに歩け」と言っても、「えへへ」と笑いながら。だから、邪魔をしにきたみたいなものですよ。それも授業の途中から入ってきて。

　そういうことで、勉強したのかしないのか、よくは覚えていないけれども、教科書だけはあったから、それを見て、ああ、そうかと。そんな勉強です。

**○石田**　ほかの学校の記録を見ると、例えば農作業をさせられたりとか、学校の校舎が壊れているのを直すのに駆り出されたりしている記録があるのですが、助野さんご自身は、そういう思い出やご記憶はありますか。

**○助野**　あまりないな。させられたというよりも、自分でしないとしようがないからやったと。その代わり、みんなきっちりとはやらないよ。何カ月に一遍とか、時々皆と寄ってやるというぐらいのことで。そのほかは、今言う手抜きの教育です。書いた紙がなかったら黒板に書いて、それを見て、ああそうかとこちらは筆記するようなことで、勉強のうちに入ったのかな（笑）。まあ、自分で記録をしたら勉強は勉強だけどね。

　そのようなことで、学校では本当の専門学校というようなことはしていません。ただ、格好だけつけて。

○**石田**　助野さんはサボったりはしなかったのですか。

○**助野**　いや、みんなと一緒にサボったよ。みんな「おーい、遊びに行こう」とか、「これは一緒だから、みんな来い」と言って、授業をしていても机は別だというような、そんな毎日でした。

○**石田**　みんなでどこに遊びに行かれたのですか。

○**助野**　いや、遊びといっても今の時代のように物があるのではなしに、ただ人が、ここからここにいて、何やらいろんな話をしたり、「おーい」と言ったら、それでとにかくみんなが集まったという感じですね。それ以上のことは、あまり記憶がないな(笑)。勉強したという記憶がないです。

○**小池**　では、集まってお酒を飲むとか、それぐらいはしていたのですか。

○**助野**　いや、酒もなかったのじゃないかな。私は酒を飲まないからね。だけど、酒飲みはいなかった。家に帰って内緒で飲んだ人はいるかもしれないけれども。

○**小池**　あと、たばこを吸うとか。

○**助野**　たばこもなかったのではないかな。ただ、寮の隣の家のところで一人か二人、時々わいわいと言って、酒を飲んでいたのか何か知らないが、そんなことがあったかもしれない。二、三回、そんな記憶があるけどね。

## 原爆の後遺症について

○**石田**　最後に補足的な話をうかがいたいのですが、被爆されて今年で六九年ですが、原爆症は何か感じたことがありますか。

○**助野**　いや、それが私は元気で、時々人に「おまえはあれだけ原爆でやられたり、いろいろしたのに、いまだに元気で生きとるな」と言われてね。

　そうかといって、「そない言うけど、おまえ、これだけの事故があったんやで。こんなんしたんやで」と言われても、「忘れた」と(笑)。今でも元気です。

　ただ、年ですね、ちょっと頭の物覚えが悪い、目がよく見えない、鼻がおかしい、耳がおかしい。そんなだから、もう家内も相手にしてくれない(笑)。言っても、「え、そうか」でしまい。

○**小池**　例えば、白血球に異常が生じると、だるくなったり、吐き気がしたりしますが、そういうことはありませんでしたか。

○**助野**　何にもない(笑)。生活したり何かしたりする上では、何も影響はない。物書きが下手だとか、物覚えが、おかしなことを言うなと言われるかもしれないが、それは年のせいだと。

○**小池**　がんになったりということもないわけですね。

○**助野**　ないです。そうかといって、「あんた、今度病院に行って、こんなんしたよ」と言って、「へえ」と。「へえ」と言うことは、病院へは行ったかもしれないけれども、元気だと。とにかく病気の原因になるものを、いまだに担いでいないと、元気そのものだと。だから、八六歳まで元気で生きているのです。

○**小池**　ご結婚はいつごろされたのですか。

○**助野**　結婚は三一歳か。違ったかな(笑)。芦屋に帰ってきて。三〇を超えていました。そうかといって、私は原爆でこんな事故を起

こしてこんなという話はしていないから。後でだんだん何やらと言って、そうかと聞いて知っているのはそうだけど、結婚した時に私はこんな欠陥を持っているとか、こんなあれを受けたとか、そんなことは一切言っていません。

（息子さんの方を向きながら）だから、この子だって私がどんな病気だったか知らないな（笑）。原爆に対するものは、特に今のところは出ていないみたいなので。私もあの原爆をあのとおりまともに受けたら、今ごろ生きていませんよ。ところが、ぺしゃんこになって頭の上にたくさん木があって、何時間もじっとしていたら、放射線も通らないから（笑）。

それから、現場からすぐというか、何時間かたって、明くる日には離れていった。そこから逃げて帰ったとか、そんなことで、本当にうまくかわしたなという感じが自分でもします。（終了）

## 付録　広島原子爆弾被爆体験記

助野信正

太平洋戦争も既に末期を迎えていました。日本全国各都市が空襲に見舞われていたさ中、軍都広島は未だその惨禍には会っていませんでした。それが何と、一瞬にして十数万人の人々が亡くなったのです。この時この空爆が人類最初の原子爆弾とは、誰も知らなかったのです。

当時学生だった私（昭和三年生れ）は、旧制中学四年生でした。が、その一年間戦争による学徒動員で神戸の工場に動員され、五年生は、カットされて卒業となりました。高校進学するのも工場動員のまま八月迄延期され、ようやく八月開校となりました。私は広島工専へ。八月一日入学式があり、授業が始まり一週間が過ぎました。八月六日当日は朝から警戒警報が発令されていましたが、学友と定刻八時に登校、校舎二階の教室中央に着席。出席点呼を受けたその直後の八時一五分、一瞬の強烈な閃光が目を焼き左窓側二列の机上がボッと燃え上がった、一瞬の感覚で焼夷爆弾攻撃を受けたと思い、とっさに立ち上がり机列の後方に逃げようとしましたが、次の瞬間、強烈な爆風と轟音と共に、足をすくわれ、机の間に投げ倒されました。完全な校舎の倒壊、木造の破れ千切れるバリバリという音と物凄い壁土の粉塵で呼吸も苦しく、数十分間は生気を失い、真っ暗ななか身動きもできなかった。ようやく明るさが射込むと同時に体中がキリキリと傷みはじめました。足が柱に挟まれていることに気付き、手のとどく壊れた机の脚木等でこじ開け、何とか体が動ける様になりました。しかし体のあちこちから血がにじみ、痛みが走りだしても手当てのくすりなどありませ

ん。ガラスの破片、破れた天井板、へし曲った机等体中の無数の傷を、着ていた布を引きさいて、とにかく傷口を押えました。それより身を守るため、逃げ出す事が先決、火が燃え出しては万事休す、何とか天井裏に這出しました。そこここで友人の呻き声のする隙間をこじ開け、引き剥し、助け合って、ようやく地上に降り立ちました。

校庭のまわりの木陰には大勢の傷付いた負傷者、あるいは動けない人々が横倒っており、誰もしばらく動く事が出来ずにいました。私も傷付いた友人と共に、くずれる様に休息しました。

ようやく周囲の様子を確かめるべく振り返る何棟もある校舎は、爆風でマッチ箱の様に押しつぶされていましたが、幸い火災を免かれて安堵しました。市街地の方を見ると、北西方面が一面に焼煙・炎がたなびき、頭上には真夏の空に巨大な白煙がもくもくと立ち上がっており、その周囲を軍用機が一機舞っていましたが、私達は未だこの爆撃が一発の爆弾とは知るよしもありませんでしたが、私の郷里の空爆の経験から、何か変った空爆の様に感じました。振り返ると、後方の工場からも焼煙が上り始めました。

入学後、僅か一週間、顔も名前も定かならず、側に相寄っていた友人二～三人と、「ここにいては危険」と相談、広島市を脱出することを考えました。

正午頃、学校を出て宇品に向う途中、通りの家々は全て押しつぶされ、家の前には多くの人が傷付き、顔は焼きただれ、座り込んでいました。着ている着物は、ボロボロで、白黒のモンペ姿は黒い部分が焼けこげてレース状に引き裂かれた状態でうずくまっていました。なかには「水をくれ」と手を合せる人、お互いに覆いかぶせる人等見るも無残な光景でした。御幸橋を渡ろうとして、川の中を見ると、とても云い表わせない悲惨な光景が眼をうばいました。川の面に浮び流される無数の遺体、川上の方へどこまでも続く黒い人影、そしてまた川岸につかまり滑り落ちる人々、いや水を求めて飛び込んでいるおびただしい人々の姿、助けようもなく、唯々見送るだけでした。さらに進むと、軍隊のトラックが、道端に折重なった死者を、頭と足を二人で持ち、荷台に放り上げ、うず高く積重ねて運んで行った姿は、この世の姿とはとても思えませんでした。そんな悲惨な車の側をすり抜け、さらに宇品港を目指して歩きながら、友人と相談を重ねたが、ここで一時の避難を見切り、市外脱出を決意しました。そのため、寮にある身回り品を取り出すべく、方角を変え、比治山の東側を北上しました。が、途中の病院や学校、鉄筋の建物も総てガラス窓は吹飛び、人陰も全くありませんでした。ようやく辿りついた広島駅近くの寮も倒壊しており、狭い防空壕に入って夕方を待ちました。昼間の移動は敵機の襲われる危険を避け、夜の出発としました。友人も各々の家に向い、一人になると、見知らぬ土地で一段と覚悟を決めました。

いよいよ夕方になり、脱出に出発、国鉄山陽線づたいに、東へ東へと歩きました。後方は、広島市内の火災が明るく燃え上っていましたが、あたりは暗闇で真直ぐには歩けませんでした。というのも、道路の片側には、負傷した多くの人が手を合わせて水を乞い、時には死人につまずき、更には、その上に転んだその感触は今も忘れられません。だが、途中で救助隊員の方から乾パンを分けてもらい、本当にありが

たかったです。朝から何も食べず、歩き回って、ようやく一袋の乾パンを手に出来、口に出来た嬉しさに涙が出ました。ようやく翌日夜明けに、二駅目の海田市駅に着きましたが、駅構内には、満員の列車が待機しており、車内には入られませんでした。止むを得ず車両の継目に両足をかけ、出発を待ちました。もうここまで来れば、忍耐でした。数時間後、ようやく発車しましたが、途中何度か空襲警報に会い、その度に停車、時には、襲撃を避けるためトンネル内に避難、汽車の排煙で呼吸もままならない事もありました。が、昼夜を徹して、翌八日早朝ようやく三宮駅に到着しました。ところが三宮周辺は、別の空襲であちこちが燃えていました。実家の芦屋も駄目かなと観念しながら、私鉄に乗り換えやっと帰宅できました。早朝裏戸を叩いて入ったところ、広島の空襲のことを未だ知らぬ父母から、「なぜ帰って来たのか」「空襲が怖かったのか」と叱られました。だがその日の朝刊新聞〝輻射熱新型爆弾〟の報を見て、手を取合って無事を喜び合いました。

そしてその後八月一五日の終戦を迎えましたが、充分療養する為、父の田舎で二ヶ月間療養生活を送ることにしました。途中、神戸市内の病院で被爆の健診を受けた結果、放射能による白血球異常と診断されました。同時に外傷数十ヵ所の傷治療を受けました。

一一月になって、ようやく学校より開校の知らせを受けましたが、学校は仮校舎で、場所も広島から遠く離れた呉市広町の海軍工廠宿舎建物でした。新聞写真では、被爆した広島市街、千田町の本校舎は見る影も悲しい情景でした。でも喜び勇んで、その地に赴むき、集った学友の中には、顔面のケロイド症状のひどい仲間もおり、亡くなった学校関係者は、約五〇〇人中、一〇〇人と聞かされました。その頃広島被爆地は七〇年間、草木も生えないと報じられていました。

思い起すと、その年の三月、受験のため初めて訪れた広島で世話になった宿は、相生橋のたもとにあった「虎屋」旅館でした。戦時中の旅は、みな米持参でしたが、お女将には実に暖かく世話をしていただきました。川向うの家からは〝乙女挺身隊〟の曲が悲しく流れていました。そしてここが何と爆心直下であったとは。恐らくあの原爆で、一瞬にして、亡くなられたのでしょう。あの旅館の中で、或は庭先で、どんなに熱かったでしょう。

ああ・・・・、安らかにお眠り下さい。